

旧奈良少年刑務所

藤田 盟児

生活環境学部 住環境学科 教授

旧奈良少年刑務所は、もとは明治の5大監獄の一つであった奈良監獄であり、世界的なジャズ・ピアニスト山下洋輔氏の祖父である山下啓次郎氏が設計した建築である。

明治政府の重要な課題の一つは、近代的国家として西洋世界に承認され、不平等条約等の解消をうながすことであった。そこで封建時代のままであった監獄の近代化＝西洋化を目指して、明治24年(1891)に工部大学校造家学科(現東京大学工学部建築学科)卒の妻木頼黄の設計で巣鴨監獄の建設に着手し、同28年に完成した。ついで明治32年から全国的主要監獄の近代化にも着手し、その設計を担当したのが、東京帝国大学工科大学の造家学科で建築学を学び、司法省の建築技師になっていた山下啓次郎である。山下は、明治34年(1901)に司法省を休職して奈良県の委嘱で渡欧し、欧米8カ国で約30の監獄建築を視察して、その成果をもとに奈良監獄を始め千葉や鹿児島等の監獄を設計した。しかし、日露戦争の影響で完成は遅れ、奈良監獄が完成したのは明治41年であった。昭和21年に少年刑務所に変更され、平成28年に閉鎖されたが、美しい明治建築であることから現在、民間事業者による博物館やホテルへの転用が進められている。

奈良監獄は、そうした明治時代に近代化された監獄で唯一、全体の旧状をとどめており、明治43年(1910)にはロンドンで開催された日英博覧会に、日本の監獄の近代化を示すモデルとして模型が展示されたことが示すように、明治政府の司法における理想を今に伝える貴重な歴史的遺産であることから、現在、多くの建物が重要文化財に指定されている。

山下が大学を卒業した明治25年(1892)頃の世界の建築デザインの主流は、折衷様式と呼ばれ、さまざまな歴史的様式を建物の用途や性質に合わせて使い分ける考え方であった。たとえば東京帝国大学の前身である工部大学校の造家学科の第1期生である辰野金吾は、日本銀行本館のデザインに厳格性や統一性を示す古典様式を用い、他方、奈良ホテルでは和風の外観意匠と和洋折衷の内観意匠を組み合わせるという風であった。

監獄の近代化にあたって山下が考えたことは、実際に完成した建築(写真1)をみるとキリスト教の建築様式であるロマネスク様式を用いて、人道主義を表現することであったと考えられる。ロマネスク様式は、古代のローマ建築様式が半円アーチなどの部分に残り、そこにフランスやドイツ・スペインなどの土着の建築様式が混交して生まれ、中世に多くの城館建築の様式として使われた様式である。そうした城館建築を思わせる様式であることも、

ロマネスク様式を採用した理由であったと思われる。たとえば、山下は千葉と鹿児島監獄の設計も行ったと推測されているが、奈良監獄と千葉監獄の正門がほぼ同じであるのに対して、彼の故郷である鹿児島に建てた鹿児島監獄の正門は、粗石積のより要塞的デザインであり、城館的性質を考慮していたことが示されている。ただし、山下は19世紀の折衷様式の建築家であるから、純粋なロマネスク様式ではなく、白い石で造られた水平帯やアーチの縁飾り、やや持ち上げられた双塔のドームなどにルネッサンス様式や一部はバロック様式も混交しているが、軒を飾るロンバルディア帯や、重厚な壁面に小さく開けられた窓など基調はロマネスク様式であったと思われる。

正門に入って正面には、2階建ての、中央と両端をやや突出させ左右対称の事務所棟があり、庁舎と呼ばれていた。これも軒にロンバルディア帯を使い、傾斜屋根をかけて小さなドーム窓を乗せ、分厚い壁に小さな窓を隅石付きの楕円形アーチで開ける中世城館風であるが、張り出した部分には三角形の屋根型（ペディメント）と半円アーチをもつ大きな窓で強調された中央部をつくり、左右対称性を強調しているのはバロック的デザイン手法である。

このように19世紀の折衷様式の建物は、どうしても異なる様式が混入し、あるいは目的に合わせて変化する箇所もあるので、本来のロマネスク様式と区別するためにネオ・ロマネスク様式と呼ばれる。そして、19世紀はさまざまなネオ様式が用いられた時代であり、そのようにして本来は芸術的な一体性をもつ建築様式を、目的に応じてばらばらに利用していた結果、建築から芸術性が剥離していき、20世紀になるとすべての歴史的様式は頼りないものとされて、工業社会にふさわしい建築様式としてモダニズム様式が1920年頃に誕生する。

庁舎の背面側は、六角形につくられた監視所であり、その各辺に舎房と呼ばれる囚人の収容棟が放射状に5棟接続されている。これは、建設時には「中央看守所」と呼ばれており、ここにいる看守から5棟すべての廊下がみえる監視用形式である。監視所と舎房は2階建てであるが、吹き抜けになっており、監視がしやすい内部空間になっている。

このほかにもアーチを連ねた倉庫を兼ねる塀や、八角形の塔をもつ病院棟などが同時期のレンガ造りの建物として敷地内に建てられており、大正時代に増築された職業訓練棟なども含めて、近代化された日本の監獄の全容が分かる唯一の遺構である。